

文学研究ってどうやるの？ —ナボコフ『賜物』の読み方をめぐって—

● この授業の目的と目標

目的：ウラジーミル・ナボコフの作品を題材に、文学研究の方法を知る。

- 目標：1. 『賜物』のラストシーンをナボコフの伝記的な事実を参考に解釈できる。
2. 作品論とテキスト論、それぞれの特徴を説明できる。



ウラジーミル・ナボコフ (1899-1977)

ロシアに生まれ、イギリスで学び、ドイツやフランスで亡命生活を送った後、アメリカに渡って有名になったが、最後にはそのアメリカも捨てて、スイスで亡くなったバイリンガルの亡命作家。

詩人。昆虫学者。チェス・プロブレム作家。

代表作：『絶望』、『ディフェンス』、『賜物』(ロシア語)

『ロリータ』、『ブニン』、『アーダ』(英語) など。

● ナボコフ略年表

1899年 サンクト・ペテルブルグ生まれ。

1917年 ロシア革命→ロシアを去りロンドンへ。

1922年 ケンブリッジ大学卒→ベルリンへ、ロシア語で執筆活動を行う。

1937年 カンヌへ。

1938年 『賜物』を書き終える。英語での執筆を始める。

1940年 アメリカへ。2年後にハーバード大学比較動物学博物館指定研究員となる。

1948年 コーネル大学准教授に就任。4年後にハーバード大学スラヴ文学科客員講師を務める。

1958年 『ロリータ』がアメリカで出版され、一躍有名に。

1959年 アメリカを去り、ヨーロッパへ。

1961年 スイスでホテル暮らし。その後はスイスで執筆と自己翻訳などを行う。

1977年 ローザンヌの病院で没。

● 『賜物』のあらすじと作品論的解釈

はじめての詩集を刊行した詩人フォードルが、亡命先のベルリンで紆余曲折を経たのちに『賜物』という小説の執筆を決意するという話。ラストに「さらば、本よ！」で始まる詩が置かれている。

● 『賜物』のラストシーンをどう読むか？「本」とは何のことだろうか？

☆ ヒント：ナボコフの作家としての人生における『賜物』の位置付け。

- 自分の研究について

自分自身のオリジナルな視点から『賜物』を読みなおすこと。

- ＊ 3つの読み替え ＊

1. ナボコフは（作家→昆虫学者）である。
2. 『賜物』の舞台は（都市→森）である。
3. 『賜物』の主人公は（フョードル→『賜物』）である。



- 『賜物』の主人公は『賜物』

ある作家のメイキング・オヴ（池澤夏樹）から、ある書物のメイキング・オヴへ。

→ 主人公としての書物。『賜物』を書物の成長物語として読んでみる。

「書物とは、ただ単にそこから必要な情報や教養を得るための便利な道具ではない」

（今福龍太『身体としての書物』東京外国語大学出版会、2009年、15頁）

「書物とは、おどろくべき変身能力をそなえた、人格を持つ生命体なのである」

（今福龍太『書物変身譚』新潮社、2014年、3-4頁）

- 蝶としての書物

『決定的証拠』（1951年）英語

→ 『記憶よ、語れ』（1951年）英語

→ 『向こう岸』（1954年）ロシア語

→ 『記憶よ、語れ—自伝再訪』（1967年）英語

＊たまご→幼虫→さなぎ→成虫（蝶の変態）

- 書物の羽化

「さらば、本よ！/(…)/ そしてこの行も終わることはない。」

（ナボコフ、ウラジーミル『賜物』沼野充義訳、河出書房新社、2010年、580頁）

「わが新作よ、ネヴァ河の湖畔の町へ飛んでいけ。栄誉の貢物を---曲解や、喧噪や、罵倒を、私のためにもらって来い！」（プーシキン『オネーギン』池田健太郎訳、岩波文庫、2011年、32頁）

→ 「作者が書物を手放すシーン」（さらば、本よ！）から、

「書物が作者を離れるシーン」（さらば、ナボコフよ！）への読み替え。



- 作品論とテキスト論、それぞれの特徴について

- 読書案内

ナボコフ、ウラジーミル『ロリータ』若島正訳、新潮文庫、2006年。（ナボコフ入門）

若島正『ロリータ、ロリータ、ロリータ』作品社、2007年。（入門的な研究書）

キューブリック、スタンリー『ロリータ』ワーナー・ホーム・ビデオ社、1962年製作。（傑作映画）

秋草俊一郎『ナボコフ 訳すのは「私」』東京大学出版会、2011年。（ナボコフ研究の最先端）